

ようです。

「1kg 当たり 20 ~ 30Bq の放射能は、体外にあれば大きな危険性はない。内部被曝で深刻なのは全身の平均値だからです。心筋細胞は殆ど分裂しないため放射能が蓄積し易い子供の心臓は全身平均の 10 倍以上になることもある。」と博士の警告です。

チェルノブイリ原発事故時、周辺住民は何も知らされず、日常の生活をしていましたが、その後強制移住させられ、現場から 100km 離れた移住地で生活しているが、事故から 25 年以上経った現在でも、脳卒中や心筋梗塞で亡くなる人が多いし、喘息、糖尿病、心臓病等で苦しんでいる人が多い、が内部被曝との関連性が証明されず、救済はないという。

更に博士は「被曝の影響は、胎児や小さな子供に大きく出る。遺伝の影響で次世代に現れる可能性もある。」と警告しています。

チェルノブイリ原発事故後の救済に活躍する博士の行動に賛同した日本人がおります。

茨城大名誉教授の久保田護先生で、博士の論文を日本語に訳し、上記の本は先生が自費出版した本です。

また先生は日立市に「チェルノブイリの子供を救おう会」という団体を立ち上げ、原発事故の汚染地域に住むベラルーシの子供達を毎年呼び寄せる活動を 1993 年から実践しております。

日立市の保養所で約 1 ヶ月の生活で暮らす、放射能汚染がない場所で、汚染されていない飲食物を摂取すると、体重 1kg 当たり 30 ~ 40Bq があつた子供達が、約 1 ヶ月後の機帰国時には 5Bq 程度に減少していることが実証されています。

同博士は日本での原発事故に心を痛み、「日本の子供達がセシウム 137 で体重 1kg あたり 20 ~ 30Bq の内部被曝をしていると伝えられているが、これは大変深刻な問題で、特に子供の身体に入ったセシウムは心臓に凝縮されて心筋や血管の障害に繋がる可能性がある。」と指摘し、大人よりも子供の影響が大きく、幼児、胎児の影響はより大きいことをデ・タは示している。

日本を代表する放射線医学の権威である某先生が、低量被曝は健康には影響ないと県内で講演したそうですが、聴講した人が県内には多数いると思います。

Yu.I.バンダジェフスキ - 博士や久保田名誉教授の報告と、後述しますが被曝被害にない健康障害に苦しむ諸外国の例をみても、低量被曝は健康には障害はないと断言するのは、全くのド素人である私さえも驚きです。

低量被曝でも十分な注意を払う必要があります。因果関係は完全に証明されていなくとも抵抗力が衰えることは確かなようです。

後で悔やむなら、未知であっても今を大切に最適と思われる方法で対処して下さい。

福島の子供達を内部被曝から救って下さい。

第二次大戦末期、都会の学童を避難させる、学童疎開というのがありました。昭和 19 年 8 月頃から終戦の昭和 20 年 8 月まで行われ、8 月末頃には親の元に帰ったようです。

同じようなことはナチスドイツも実施しておりました。

目的は全く違いますが、福島の子供達を汚染されていない清浄な地で、汚染されていない飲食の摂取で内部被曝をきれいな身体にして戴く手段はありませんか。